



Title	北海道スキーの父・三瓶勝美：北海道スキーの発祥から発展期における業績
Author(s)	中浦, 皓至; NAKAURA, Koji
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 82, 199-226
Issue Date	2000-12
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.82.199">https://doi.org/10.14943/b.edu.82.199</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/28821">https://hdl.handle.net/2115/28821</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	82_P199-226.pdf



# 北海道スキーの父・三瓶勝美

—北海道スキーの発祥から発展期における業績—

中 浦 皓 至

## Katsumi Sanbe, the “Father of Skiing in Hokkaido” : His achievements from the introduction of skiing in Hokkaido in 1912 until 1929

Koji NAKAURA

### 目 次

はじめに	200
第一章 スキー技術の習得	202
第一節 生い立ち	202
第二節 スキーの初体験	204
第三節 旭川のスキー講習会	206
第四節 スキー登山の嚆矢	208
第二章 札幌スキーの発祥	209
第一節 月寒のスキー講習会	209
第二節 藻岩山スキー登山	210
第三節 スキー製作と札幌スキー倶楽部の創設	212
第四節 札幌スキー倶楽部のスキー講習会	215
第三章 スキー発展期の業績	216
第一節 小樽へのスキー普及	216
第二節 軍事スキーの指導	217
第三節 スキー発展期の活動	219
おわりに	221

### Abstract

Although it is known that skiing started in Hokkaido with the opening of a skiing school by Theodor Edler von Lerch in February 1912, little is known about the spread of skiing in Hokkaido in the years following its introduction in 1912. The purpose of this study was to clarify how skiing spread in Hokkaido during the early period after its introduction by examining the achievements of Katsumi Sanbe, the so-called “father of skiing in Hokkaido.” Information was mainly obtained from newspapers in Hokkaido from 1912 to 1929 and from records kept by the Japanese Army. The main findings were as follows.

1) Sanbe taught Lerch’s skiing techniques to army troops and to many private citizens, including Hokkaido University students.

2) In September 1912, Sanbe established the Hokkaido University Skiing Club, the first university skiing club in Japan. In the same year, he also established the Otaru Skiing Club in October and the Sapporo Skiing Club in December. These clubs played a fundamental role in popularizing skiing in Hokkaido.

3) After establishing the Sapporo Skiing Club, Sanbe worked to popularize skiing in Hokkaido.

4) Sanbe worked together with Shiro Nakano, who produced high-quality skiing equipment, to make skiing more popular in Hokkaido by offering skiing equipment at affordable prices.

5) Sanbe made efforts to educate the citizens of Sapporo about skiing techniques through articles published in newspapers.

### はじめに

日本の近代スキーは、1911（明治44）年1月、高田における Theodor Edler von Lerch（以下、レルヒ）によるスキー講習会から始まった。レルヒは、1869年8月31日に、当時オーストリアとハンガリー二重帝国のハンガリー領内にあったプレスブルグ（現スロヴァキアの首都 Bratislava）に生まれた。生粋の軍人で、日本陸軍の軍事研究のため来日したが、陸軍の依頼によりスキーを指導することになった。高田では、第十三師団長の長岡外史がスキーを普及する運動の先頭に立った。具体的には、①新聞による宣伝活動、②講習会の開催による指導者養成、③スキー技術を伝えるためのスキー団体の結成などである。同師団の堀内文次郎大佐や鶴見宜信大尉など優秀な将校が、師団長の意をくんで積極的に活動したために、わずか数年間に新潟を中心に秋田や青森までスキーは普及した。

翌1912（明治45）年2月、レルヒは旭川第七師団に転属になり、ここでもスキーの指導を行った<sup>1)</sup>。第七師団長の林太郎もまた、マスコミによる宣伝と民間人を含めた講習会、さらにクラブの結成など、長岡に学んでスキーの発展に取り組んだ。従来、北海道のスキーはレルヒの帰国とともに衰退したといわれていたが<sup>2)</sup>、三瓶勝美や中澤治平両中尉など優れた人材が奮闘したために、札幌や小樽など道内各地にスキーが普及し定着した<sup>3)</sup>。同年3月に三瓶や中澤らが行った月寒スキー講習会に参加した東北帝国大学農科大学（現北海道大学；以下北大）予科生の角倉邦彦や稲田昌植らが中心になって北大文武会にスキー部が創設された。特に札幌においては、このクラブが大正期のスキー界をリードしたのである。

スキーが定着し発展するためには、雪が積るといふ自然の他に地理的な条件や社会的な条件が整わなければならないが、とりわけ情熱を燃やして活動する有能な人材が必要である。北海道の場合、それに該当する者は小樽の苫米地英俊、北大の角倉邦彦や稲田昌植、旭川の津田精一や松田秀太郎など数多いが、なんといっても真っ先にあげなければならないのは札幌の三瓶勝美であろう。なぜなら、三瓶は旭川スキー講習会の正式研修委員26名の一人であり、この委員の中で三瓶のように生涯北海道スキーと強く関わった者は他にいないからである。しかし先行研究では、「三瓶氏の努力によりスキーが普及した」という類の概括的な論述しかみられず、実証的な検証はほとんどなされていない。

これを具体的にみていくと、三瓶の名が最も早くでてくる「スキー部報告」<sup>3)</sup>には、

レルヒ中佐より講習を受けし三瓶、中澤、松倉等の将校達が月寒に於て、講習会を開く由の通知があったので、最も好きなもの六名が講習を受けた…中略…九月にその六名発起人とな

り、文武会にスキー部設置を建議して可決されスキー部は茲に設立された<sup>4)</sup>と記述されている。同じく北大スキー部の稲田（後に全日本スキー連盟初代会長；以下SAJ）も多くの論文を著しているが、三瓶に関する記述は角倉とほぼ同様である<sup>5)</sup>。

北大スキー部の『記念』には、小川によって体系的なスキー部史が初めてまとめられている。明治四十五年に至り奥國参謀将校テオドル・フォン・レルヒ氏の来朝あり、高田、旭川の各師団に於てレルヒ氏教官となり講習会あり、同三年には旭川に於て講習を受け三瓶、松倉、中澤の三将校が月寒に帰隊せられた為め、曩に之が研究に余念なかつた先輩は三瓶氏に乞ひて、月寒に於て約十日間の講習を受け、初めてスキー術なるものを会得する事が出来る様になった<sup>6)</sup>

北大スキー部史の三瓶に関する内容は、山崎<sup>7)</sup>や小川<sup>8)</sup>等多くの研究者に引用されている。瓜生は、山崎説をベースにフィールドワークで、『スキー三国志』を記している。北海道に関しては、

そこ [レルヒの講習会] で養成された最初の指導員、三瓶勝美大尉によって北大の学生たちに伝えられ、さらに一般に普及していった。これが北海道スキーことはじめの定説である<sup>9)</sup>と述べた後に、三瓶については幼少のころ覚えた、いわば我流のスキー技術をきわめて広い範囲に教伝した「北海道スキーの開祖」であると論述している。これについては後に検討したい。

北海道内の先行研究をみていくと、まず大野の記述は、北大スキー部史の内容がほとんどそのまま引用されている。大野は、北海道スキー界の重鎮であっただけに、その記述は『北海道創立五十周年記念誌』（北海道スキー連盟；1982）や『宮様スキー五十年史』（札幌スキー連盟；1979）など、公的な刊行物に孫引きされオーソライズされている。

つぎに佐藤は、三瓶の四男・本郷精一（旧姓重成）からの聞き取りや、新聞資料など独自の研究も入れているが、基本的には小川説を引用し「三瓶勝美は北海道スキーの先覚者」<sup>10)</sup>であるとしている。佐藤は、三瓶が高田で教わったという息子の口吻を鵜呑みにして、検証も不十分なまま論述したために事実の誤認があり、訂正されなければならない箇所がある（後に詳述）。

軍隊史研究家の高橋は、

三瓶少佐はスキー術を連隊だけでなく、一般人にも広め北大スキー部の創設に、郵便業務のスキー活用に、またスポーツとしてのスキーを広く伝え、教育指導に当たったのである。そのため現在でも『北海道スキー発展史』には最初に三瓶少佐の名前が挙がり、その功績を讃えている<sup>11)</sup>

と記述し、三瓶の履歴も記している。しかし、生年月日を間違えたり月寒のスキー講習会（後に詳述）の講師を入れていないなど不備がみられる。

以上のように、三瓶に関する先行研究は、月寒の三瓶勝美らによるスキー講習会がきっかけで北大スキー部が創設されたという北大スキー部史の観点であり、以後も倶楽部や技術の発展史のなかでしか論述されておらず、大まかには北大説をほぼ踏襲している。

いままで、スキーの歴史は多くの先達によって研究されてきたが、組織や技術の発展史が多く、人物史の視点からとらえたものは新井による樺太の桜庭留三郎と金井勝三郎<sup>12)</sup>、白田による高田の高橋良や長岡外史<sup>13)</sup>など少数である。

そこで、本稿の目的は明治45年の旭川スキー講習会から大正時代にかけて、北海道のスキー史を掘り下げることによって、北海道スキーの発展に貢献した三瓶勝美の業績を履歴とともに解明することを目的とする。

## 第一章 スキー技術の習得

### 第一節 生い立ち

まず三瓶勝美の履歴からみていこう（表1参照）。1883（明治16）年3月8日に札幌郊外の篠津村（現江別市篠津）において、士族三瓶留松・母タカの四男四女の長男として生まれた。父留松は名越源三郎直一の三男として1862（文久2）年に生まれ、1881（明治14）年に三瓶梶助とモトの娘タカと結婚、養子になって三瓶の姓になった。同年実の兄名越源五郎、弟名越又八など仲間8人と共に青森から屯田兵として篠津兵村に入植した<sup>14)</sup>。

勝美は出生地の篠津で13歳のとき、父が日清戦争で出征して留守中に父のスキーをはきその痛快さを体験した（後述）。

1901（明治34）年に札幌中学（第5期生）を卒業した勝美は、士官候補生として歩兵第二五連隊に入り、同35年陸軍士官学校（第15期生）を卒業した。1903（同36）年3月歩兵少尉になり、同年5月から10月まで森海岸監視哨長、同年10月歩兵第二五連隊小隊長として乃木軍に属し旅順方面にて参戦し、12月に二〇三高地戦闘で負傷して東京渋谷予備病院に入院した。

翌年中尉（図1）、1906（同39）年連隊副官、1908（同41）年から約1年間樺太守備隊副官をつとめた。樺太滞在中にスキーを履き、現地で開かれたスキー大会に出場した。次のように回顧している。

明治四十二年樺太守備隊でスキーで谷を越え翌年の紀元節に樺太第一回のスキー大会が行われたがこれは恐らく本邦最初のスキー競技であろう<sup>15)</sup>。

ここで「翌年の紀元節に行われた」とあるが、この大会は2月11日ではなく1910（明治43）年3月13日である。三瓶は選手として参加し、みごと2位に入賞したと樺太日日新聞<sup>16)</sup>に報じられている。さらに、「これは恐らく本邦最初のスキー競技であろう」については、この頃の樺太スキーはストーであってスキーではないという山崎説によって我が国最初のスキー競技会とはなっていない。

1912（明治45）年2月から旭川でレルヒのスキー講習会に参加し、正式にスキー技術を習得したことは、すでに述べた通りである。佐藤は、三瓶の息子の本郷精一が「父は高田にいてレルヒの講習を受けたと云っていた」<sup>17)</sup>という口述伝を信じて「高田にいった可能性は多分にある」<sup>18)</sup>と述べている。しかし筆者は、①三瓶が多くの回顧談を残しているにもかかわらず、どこにも高田行にふれていないこと、②連隊から旭川への派遣が記録されている『歩兵第二十五連隊歴史』（歩兵第二十五連隊の日誌）に高田への派遣が記されていないこと、③高田のスキー講習会参加者名簿にも名がないことなどから、三瓶がスキー研修のため高田に行った可能性は低いと考える。

1912（大正元）年大尉、次章以降で述べるように、同年札幌スキー倶楽部が設立されるまでその先頭にたち、設立後も札幌スキー倶楽部の要職につき、講習会の主任講師としても活躍した。さらに、スキーの講演や技術指導のためにあちこちに招かれた。1917（大正6）年第七師団副官となり、スキーの軍事利用がクローズアップされるようになったことから、1919（同8）年から22年まで第七師団のスキー教官<sup>18)</sup>として奮闘した。その間に1920（同9）年少佐、翌21年歩兵二七連隊大隊長となり、23年軍縮のため退役軍人（予備役）となった。その後、1924（同13）年か

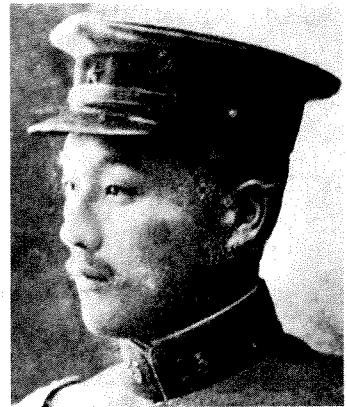


図1 中尉時代の三瓶勝美

表1 三瓶勝美の履歴 (中浦皓至, 2000年9月製作)

年	年号	年齢	記述
1883	明治16	0	北海道札幌郡江別町篠津に生まれる(3月8日)
1895	28	13	・父の出征中に樺太ストーを履き痛快さを体験する
1901	34	18	北海道庁立札幌中学校卒業
〃	〃		士官候補生歩兵第二五連隊入隊
1902	35	20	陸軍士官学校卒業
1903	36	21	任陸軍歩兵少尉
〃	〃		森海岸監視哨長(5月26日~10月21日)
〃	〃		歩兵第二五連隊小隊長として日露戦争に出征
1904	37	22	任陸軍歩兵中尉
1906	39	24	歩兵第二五連隊大隊副官
〃	〃		キクと結婚し(4月)、四男四女をもうける
1908	41	27	樺太守備隊副官(4月7日)
1910	43	28	・豊原の第1回島技ストー大会(3月13日)で2位
〃	〃		歩兵第二五連隊付(6月28日)
〃	〃		・月寒で英国武官 S.A, デルメラトクリッフのスキーにのる
1912	45	29	・旭川第七師団にてレルヒ中佐よりスキーを教わる(2月)
〃	〃	30	・歩兵第二五連隊(月寒)にて教官としてスキーを伝授(3月)
〃	〃		・中野時計店(二代目)にスキー製作を依頼し了解される
〃	大正元		任陸軍歩兵大尉(中隊長)
〃	〃		・札幌で最初のスキー講習会(12月22日)が三角山で開催
〃	〃		・札幌スキー倶楽部を創設(12月23日)され幹事長に就任
1913	2	30	・札幌大通り西5丁目でスキー講習会(2月16日)を開催
1914	3	32	・札幌で最初のスキー大会(3月8日)が銭函で開催される
1917	6	35	第七師団副官
1919	8	37	・第七師団スキー隊の主任教官を務める(大正11年まで)
1920	9	38	任陸軍歩兵少佐
1921	10	39	歩兵第二七連隊大隊長
1923	12	41	軍縮のため予備役となる
1924	13	42	体育奨励に関わる事務を委託され道庁に勤務
〃	〃		・第2回全日本選手権大会(高田)に北海道選手団総監督
1925	14	43	・再建された札幌スキー倶楽部の理事長に就任(1月14日)
〃	〃		・第3回全日本選手権大会(大鰐)に北海道選手団総監督
1926	15	44	・第4回全日本選手権大会(豊原)に北海道選手団総監督
1929	昭和4	47	・札幌スキー連盟が創設され常任委員に就任
1933	8	51	・北海道スキー工業会の設立に尽力し初代検査委員長になる
1937	12	55	旅行中洞爺湖駅付近の列車内で倒れ死去(4月1日)
1961	36		・スキー発祥五十周年記念祭で功労者として表彰される。

ら体育奨励に関する事務を囑託されて北海道庁に勤め、全日本スキー選手権大会には北海道スキー選手団の総監督を務めた。これに関して、小川が「第2回と第4回の選手権に総監督として、高田と豊原に出馬している」<sup>19)</sup>と記述し、栗林もそれを引用しているが<sup>20)</sup>、新聞で確かめると第3回の大鰐にも総監督として参加していた。従って、北海道チームの総監督として連続3回出場していることになる。

1925(大正14)年1月に再建された札幌スキー倶楽部の理事長<sup>21)</sup>、1929(昭和4)年12月に札幌スキー連盟が創設されたときは常任委員になった。1933(昭和8)年には北海道スキー工業会

を設立させ、初代検査委員長に就任した。1937（昭和12）年4月、旅行中に洞爺湖駅付近の列車内でたおれ55歳<sup>22)</sup>で逝去した。1960（昭和35）年の「スキー発祥五十周年記念祭」に際して、三瓶は翌年2月に高田で開かれた国体スキー大会の開会式において、大野らと共に地方団体のスキー功労者として表彰された<sup>23)</sup>。

尚、勝美には四男四女がいたが、長男の進はSAJ技術委員、北海道スキー連盟理事や教育部技術委員を、三男の英世は国鉄に勤め国体選手として活躍した。四男本郷精一（旧姓三瓶重成）は、1940年の札幌冬季オリンピックの候補選手で戦後北海道スキー連盟理事長、SAJ理事、日本バイアスロン連盟理事長などを歴任した<sup>20)</sup>。

## 第二節 スキーの初体験

前述した「三瓶は幼少の頃からスキー技術を覚えた」という瓜生説は、次のとおりである。

彼は北海道江別町の出身で陸軍士官学校を卒えた。彼の父も軍人で、その父が明治二十八年の日清戦争に出征したとき、「スキー」を持ちかえった。それを彼は幼少のころから乗りまわし、明治三十年ごろには、直滑降、平地滑走、回転までできた、というから、すくなくとも彼の範囲にも、幾人かのスキーヤーがいたはずである。<sup>24)</sup>

これについては、次の三瓶回顧にかなり近似している。

私が初めてスキーをはいて見たのは十三の時（今から丁度三十三年前）父が日清戦争に出征の留守中で当時のスキーは樺太のカンヂキスキーとでも申しますかそのスキーは父が愛用してゐたのですが留守中でもありそれを穿き父の猟銃を持ち出して兎を捕った事を覚えてゐますがその痛快さは今でも忘れる事が出来ません<sup>15)</sup>（図2）

これは、生れた年から計算すると明治28年となり、三瓶が語った昭和3年から逆算した「今から丁度三十三年前」と一致する。瓜生は日清戦争の28年に持ちかえったスキーとしているが、実際の持ち込みはそれ以前であった。勝美の父・留松がいつ樺太からスキーを持ちこんだのか、どれくらい乗りこなしたのか、つまりどれ程のスキー技術をもっていたのかについては不明である。しかし、父の乗るのを見て留守中に勝美がまねたというから、留松もある程度スキーに乗れたものと思われる。勝美も狩猟のために履いたといっていることから、少なくとも平地を歩くスキー技術は、マスターしていたようである。さらに翌年の冬、勝美は樺太で働いていたという建築家の大河原に、スキーを製作してもらい練習に打ち込んだという<sup>25)</sup>。

瓜生は、山崎の叙述から引用したと思われるが「直滑降、平地滑走はもちろん、すでにスイングまでできたという<sup>25)</sup>と記述している。しかしスイング、つまり回転までできたとは考えにくい<sup>26)</sup>。なぜなら、回転するということは斜面を滑走するということになるが、彼の生家は札幌郊外の篠津村、つまり石狩川ぞいの平坦な田園地帯であり山や坂がないこと、さらに勝美自身もそのスキーをアルペン用としてではなく狩猟のために履いたといっているからである。さらに決定的なことは、その10年後に本人が、次のように証言していることである。

その年〔明治43年6月に樺太守備隊の任務を終えて〕札幌に帰り瑞西公使松村氏〔正しくは杉村虎一瑞典公使<sup>スウェーデン</sup>〕が送ったスエーデン式スキーを歩兵第二十五連隊で私と中沢氏が付近のスロープで滑ったが直滑降と平地滑走のみで丁度その頃レルと中佐がやって来た<sup>15)</sup>（傍点筆者）

レルヒが来日したのは1910（明治43）年11月末であることから、三瓶のスキー体験は同年11、12月頃になる。なお、松下によれば<sup>27)</sup>、杉村がスウェーデン式スキーを発送したのが1910年6月で

昭和三年二月三日

# 本道初期のスキー

## 本社後援の第一回驛傳競争

### 三瓶勝美氏談

私が初めてスキーをはいて見たのは十三の時、父が丁度三十三年前です。父が日清戦争に出征の留守中で當時のスキーは樺太のカンチキスキーをとも申します。そのスキーは父が借用して来たのですが留守中でもありそれを引き父の蔵鏡を持ち出して現を掃つた事を覚えてますがその愉快さは今でも忘れぬ事が出て来ません。私は北海道の様に半年も雪におぼはれ戸外運動が出来ない所ではこの種の運動を普及させ大に健康を増上する必要があると考へてみました。かのレルヒ中佐も冬季屋内でカフエーに親しむ癖弱な都會人を引張り出し冬の山の美観を凡ての人々に味はしめ健全な戸外の自然に親しましめる事はスキーに依つてのみ得られるものであり、これを用ひて初めて健全な精神と身体とを保持得るものである。

といつてゐる。私は今身長五尺六寸、腰重二十斤に増進したのは全く四季を通じてスポーツに親しんだ結果である。

レルヒ中佐は一九〇四年マチアスキーリゾートにスキーを師事しリゾートヘルツトを

ノールウエーのスキーを修得したものであるが日本に來たのは明治四十四年、其の年の十二月高田間熱心な山岳登山の講習をしたので現在行はれたテクニツクは何んと云つても同氏から取り得たものである。

レ、レ氏は北海道へ来て第二の瑞雪であると思ふものであるが

- 1 雪質の良好と量の多い事
- 2 地形の勝れた事
- 3 湖水あり温泉あり

と確實に十年後は必ず東洋のサンモリツツとして大盛況を見るであらうといつたが今頃地下にあつて微笑をもちしてゐる事と思ふ。

明治四十二年樺太守備隊でスキーで谷を越え翌年の紀元節に樺太第一回のスキー大会が行はれたがこれは恐らく本邦最初のスキー競技であらう。その年札幌に歸り瑞西公使松村氏が送つたスニーデン式スキーを歩兵第二十五聯隊で私と中澤氏が附近のスキー場で行つたが直滑降と平地滑走のみで丁度その頃レルヒ中佐がやつて来た。

旭川へ派遣され講習を受け免状を貰つて来て札幌の名官藤原に北大を中心にしてクラブのやうなものを

り同年四月函館登山を試みたが今の職監藤原氏等もめてコラさんのノールウエー式やアルバイノールウエー式等で樺太三輪山や函館山のスキーは賑つた。大正になる頃からスキーは地形と雪と用具であるとして考へてスキーの日本製を思ひ立つて成功したがこれには中野君や小樽の梅君の助力が大にある。爾來コラさん藤原氏士などでノールウエー式は大いに研究され滑歩の著しいものがあり大正二年の紀元節には初めて第一回後援小樽間の驛傳競走を小樽新聞社の後援で決行し大成功を収めたのである。

同三四年頃北大に依つて岩別や洞川方面まで遠征され大成功を納めたがこの邊までが本道スキー界の第一期とも云はれこれの頃からスキーは一般にも了解され遂に今日の隆盛を見るに至つた。

図2 三瓶勝美の回顧談 小樽新聞（昭和3年2月22日付）

そのスキーは同年12月に陸軍省から軍隊用として実験するように高田第十三師団に送られてる。従つて、杉村のスキーを履いたというのは三瓶の思い違いで、1910年3月に英国武官 S.A, デルメラトクリッフ<sup>28)</sup>が、札幌を去るときに贈つたといわれているスキーであろう。

ところで瓜生は、先に引用した記述の「幼少の頃覚えたスキー技術」について、彼のスキー教伝の範囲はきわめて広く、札幌、小樽はむろんのこと、旭川、名寄、倶知安、函館、網走と全道にわたり、軍隊にはじまり、北大、各中学校、道庁、鉄道、通信とまことに北海道スキーの開祖にふさわしい<sup>24)</sup>

と書いている。三瓶が広範囲に教え始めたのは、レルヒの正式なスキー技術を覚えた明治45年以降である。さらに「北海道スキーの開祖」という表現は正しいにしても、旭川以外の名寄、倶知安、函館、網走まで足をのばしたという証拠は、現在のところ見つかっていない。

この節を終えるにあたって、三瓶が初めてスキーをはいた明治28年は、松川敏胤大尉が日清戦争の戦利品として持ち帰った年と同じである。しかし、彼の場合は松川と異なり、実際に練習して技術の向上がみられたという点で歴史上重要であり、日本へのスキー導入史に入れられるべき史実であると思われる。さらに三瓶は、守備隊で樺太に滞在した時も山野をスキーで歩き、同43年3月13日に豊原（ルゴエ原野）で開かれた樺太第1回島技（ストー）大会にも臨み、2位に入賞したことはすでに述べた。このような新事実もいれると「日本スキー導入史」は（表2）の通

りになる。

表2 日本へのスキー導入史（瓜生卓造研究を中心に<sup>1)</sup>）（中浦皓至, 2000年9月製作）

順	年代	記述	※ゴチックが筆者の追加部分
①	明治26年	山岳スキー家河合七郎がカムチャッカのスキーを履いて遊んだ <sup>2)</sup>	
②	明治28年	三瓶勝美が父の出征中に樺太スキーを履く、	
③	同	松川敏胤大尉が日清戦争の戦利品としてスキーを持ち帰った <sup>3)</sup>	
④	同	スカンジナビアからスキーを持ち帰った <sup>4)</sup> 、	
⑤	明治35年	青森歩兵第五連隊の八甲田山遭難でノルウェー政府からスキー2台が寄贈された、	
⑥	明治37年	青森県野辺地町の野村治三郎が外国雑誌をみてスキー2台を輸入した、	
⑦	明治42年	北大のカラーがスイスからスキーを取り寄せ予科生に見せた、	
⑧	同	カラーに命ぜら北大予科2年の山根基信が石狩街道筋の庭園内でスキーをはいた	
⑨	同	上原師団長がスウェーデンスキー2台を取り寄せ旭川北鎮小学校に寄贈する <sup>5)</sup>	
⑩	明治43年	スウェーデン公使杉村虎一が技術書1冊(雑誌2冊)とスキー2台を陸軍省に寄贈 <sup>6)</sup>	
⑪	同	英国武官 S, A, デルメラトクリッフ <sup>7)</sup> 寄贈のスキーを三瓶勝美らが履く、	
⑫	同	杉村のスキーが高田に送られレルヒ来日前に鶴見宜信らが懸命に練習した、	
⑬	同	オーストリア貿易商クラッツアーが山形県五色でスキーを行なう、	
⑭	同	東京高等師範学校の永井道明教授がスウェーデンスキーを持ち帰り、秋田中学の山口竜輔教諭に試走させた、	
⑮	同	上原師団長が旭川馬橋屋に作らせたスキー20台に北鎮小学校の先生と生徒が乗る <sup>8)</sup>	

注)

- 1) 瓜生卓造, 発掘日本スキー用具発達史2(スキー, 第73巻第2号, 実業之日本社, 1972, pp. 124-125)
- 2) 渡辺惇, 中山ヒュッテ物語, 私家版, 1993, p. 13
- 3) 山崎紫峰, 日本スキー発達史, 朋文堂, 1936, p. 15
- 4) 大野精七, 北海道のスキーと共に, 私家版, 1971, p. 7
- 5) 札幌毎日新聞, 明治45年3月1日
- 6) 松下高信, 日本における近代スキー導入のきっかけについて(1991年日本体育学会第42回大会号, p. 114)
- 7) 山崎は, その英国公使館付武官をデルメラド・クリッフといい, 彼が明治42年に札幌でスキーを履いたという女中の話を紹介している。クリッフは明治43年春札幌を去るとき, そのスキーを羽田保中尉に寄贈した(前掲3, p. 22)。

### 第三節 旭川のスキー講習会

石本陸軍大臣から西園寺公望総理大臣に送られた「奥洪国参謀中佐ド・レルヒ隊附ノ件報告」というタイトルの文書「明治44年12月28日付け陸軍省送達の陸普第四四四七号」が国立公文書館に保管されている。本文には、

目下歩兵第五十八連隊ニ隊附中ナル奥洪国参謀中佐「テオドル・ド・レルヒ」ハ更ニ明年二月ヨリ十一月迄野砲兵第七連隊ニ隊附セシメ候条及報告候也

とある。レルヒは2月6日に旭川に着任した。大野は、「中佐はさっそく二月十二日から三週間、将校ら二十四人にアルパインスキー術を教えた」<sup>29)</sup>と記述している。ここで大野は何を根拠に「二月十二日から」、「二十四人に」と記したのか不明であるが、これが北海道スキーの発祥史として定着している。しかし実際には、(図3)にもあるようにレルヒのスキー講習会が始まったのは、2月20日からであった。林太郎第七師団長は、この講習会に対して、各隊からスキー研究委員を3名づつ派遣せよと命じた。月寒歩兵第二五連隊からは三瓶勝美、松倉儀助両中尉、中沢治平少尉の三将校が参加(図4)、他に民間人として郵便関係と新聞記者など総計26名が参加した。さらに、筆者の研究ではこの講習会に短期間の受講者もあり、それらも含めると総勢37名になる。

第七師団のスキー講習会に対する目的は、①軍事上の利用方法、②一般交通上の利用方法、③体力鍛錬の補助たらしむることであった(図3)。講習内容は、基本演習と応用演習があり、前者として制動滑降、弧形滑降など大野のいうアルパインスキー術が中心であった。後者にはテレマークやクリスチャニア、さらに小さな飛台を跳び越えるジャンプなど、ノルウェー技術と呼ばれていたものも含まれていた。

レルヒがツダルスキーの高弟だったのと、高田の講習内容などから、従来は北海道でもレルヒはツダルスキー技術だけを指導した、といわれていた。しかし、北海道ではノルウェー技術もかなり教えていたのである。にもかかわらず、このような説が定着するようになった理由を三瓶自身が、当時次のように述べている。

ツダルスキー技術がヨーロッパで大きくとりあげられたのは、当時ノルウェーが三等国であったので、一等国の中欧にそのまま広めるのはおもしろくなかったからだ<sup>30)</sup>

当時、軍人の間にアルパインスキー術は一等国のスキー技術、ノルウェーは三等国のスキー技術という見方があったようである。このようなその頃の様子から、ノルウェー技術を学んでいることを知りながら、それを認めたくなかったということも考えられる。これはいかにも軍人らしい発想を基盤にしているが、当時の国情からみると、案外まとを射たものといえるかもしれない。

しかし筆者は、三瓶ら軍人のこのようなことから、誤った説が定着したのではなく、旭川ではノルウェー技術が指導されたという事実が、これまで明らかにされていなかったからではないかと考える。

講習期間は、3月11日までの三週間という短い期間であった<sup>31)</sup>。三瓶は、すでに(明治28、29年)樺太ストーヤ(明治43年)デルメラトクリッフのスキーなどで判るように、基本的なスキー技術を身につけていうえに、理論的にも優れた力量を持っていた。講習期間中の3月8、9日の両日、三瓶が投稿した論文「スキーの実用」が、北海タイムスに掲載されている。これは、北海道で初のスキー論文であり、①スキーの一般効用、②一般交通上の用途、③精神及び体育上の利益の三項目で構成されている。①ではスキーは「夏季登降り得ざる険山断崖其他河川沼地等雪を以て覆はれたる所は如何なる地も」通過でき、速力は平地で「一里半乃至二里」、斜面の滑降は「汽車の二分の一速力に達す…札幌藻岩岳頂上より十五分以内にて優に山鼻村に降下し得べし」、さらにカンジキのように身体の上下動が少ないので疲労も少ないなどと述べている。②スキーを交通上に用いて効果の大なるは喋々を要せず、としてカンジキと比較している。③本道は「半歳積雪を以て覆われ一般人民は厳寒零下10度降雪紛々たる中に蟄居防寒をこととする…断崖を滑降り或いは空中を跳飛する等のため自ら胆力を練る。」先にあげた2月20日から始まったレルヒのスキー講習会に対する師団の目標とこの三瓶論文を較べると、「軍事上の利用方法」が含まれていないのはなぜか。それに直接答える三瓶の文献はないが、前年の高田師団が陸軍省に出した『スキー研究報告及び意見』に「スキーの軍事利用は限定される」とした消極的評価をすでに三瓶は知っていたので、「軍事上の利用方法」を省略したのではないかと思われる。

研究開始ス	二週間(填) 国参謀中佐ヲオトルテレルヒニ從	談々約一ヶ月間(或ニ五重砲六隊委員ヲ	補助ヲラシムル目的ヲ以テ各隊ヨリ委員ヲ	「スキー」ノ利用方法ヲ研究シ且体力鍛錬	二十日積雪地方ニ於テ軍事上其他一般交通上

図3 第七師団歴史



する藤田由之助など合計27名である。この時、レルヒにスキーの腕前を見込まれて三瓶は、収容隊としてしんがりをつとめていた。出発して間もなく、雪が激しく降ってきた。ロウを塗りすぎて登りにかかると苦勞する隊員もいた。頂上の手前で札幌郵便局の川路が遅れ、スノーパー役の三瓶がつきそって励ましながら登ったという。登顶に成功したあと、レルヒが先導して下山開始、この時も収容隊の三瓶は、登山隊のしんがりについた。頂上より途中の高地まで、スキー滑降に格好な約1500mの斜面を痛快に滑り、深林を横ざり谷へ下り、傾斜地を登ってスキー技術を競いあった。この上もない愉快さであった、と小樽新聞社の奥谷記者は随行記「壮絶快絶なるスキー登山」に書いている。午後6時に全員無事帰着した<sup>34)</sup>。

三瓶は、このスキー登山を「旭川半面山登山滑降日誌」に、次のように要約してまとめている。

(一) 行軍里程は旭川偕行社より近文台を越えて半面山の頂上間二里半にて屈曲路を取りしを以て三里余あり (二) 半面山は千二百尺の高山にて登り三千米突(一万尺)あり (三) 登り三里を二時間五十二分の実働時間を要し下りに於て三千米突(一万尺)を十二分にて滑降せり其の内千三百米突(四千二百尺)間を一回の滑降にて僅に一分二十四秒に下りしは一瀉千里の勢いなり<sup>35)</sup>

このようにしてレルヒ隊による北海道で初めてのスキー登山が無事に終わった。

いままで北海道のスキー登山については、1912(明治45)年3月31日の北大生による藻岩山スキー登山について、

悪戦苦闘のすえ、下りで負傷者を出したがどうやら下山した。内容はどうあれこれが北海道における最初のスキー登山であったことは確かである<sup>36)</sup>

と大野が記述し、それが通説になっている。この説は、1926(大正15)年に小川がまとめた北大スキー部史からの引用で、藻岩山へのスキーによる初登山も、後述するように3月29日であるから、これ自体誤りである。いずれにしても、レルヒ隊による半面山スキー登山は、それより約一ヵ月も早かった。

## 第二章 札幌スキーの発祥

### 第一節 月寒スキー講習会

月寒歩兵第二五連隊から旭川の講習会に参加していた三瓶たちは、札幌月寒に帰隊後<sup>37)</sup>、月寒で伝達講習会(以下、月寒講習会)を開いた。第二五連隊日誌に、

三月十四日ヨリ安達少佐監督シ旭川ニ於テ三週間奥国レルヒ中佐ニ就キ研究セシ三瓶、松倉両中尉、中澤少尉ノ三名ヲシテ「スキー術」伝習ヲ開始セシム、専修員ハ左ノ如シ連、大隊本部 将校、下士ノ内一名宛、各中隊将校一名、下士二名宛<sup>38)</sup>、

と記述されている(図4)。場所は、後に地元の人たちから「くり山スキー場」<sup>39)</sup>と呼ばれた付近で、現在は住宅街になっている。参加者は、上の日誌にある「連、大隊本部 将校、下士ノ内一名宛、各中隊将校一名、下士二名宛」を基に、連隊の組織表から筆者が計算してみると41名になる。これは三瓶が、

私は三月十三日[12日の誤り]に帰ったが之を本道の実用にもスポーツにも是非広めたいという考えから、二十五連隊の将校下士兵卒ニケ班と地方班一ケ班を編成し、…(中略)…地方側からは北大、道庁、通信、各学校の先生が集まって来た<sup>40)</sup>

さらに、別のところで三瓶は、

目下当隊にて将校十五名、下士廿六名盛んに練習中なるが、このほか加入練習中なるは大学

生六名、札中三名、師範二名、高女一名、北中一名、小学校児童三名、有志三名あり<sup>41)</sup>と述べているので、軍人が41名であったことが確認される。このうち監督の安達少佐以外の氏名は不明である。しかし、翌年指導員として菅間隆二少尉、門目貞一少尉、大塚英雄少尉らの名が新聞に報じられているので、この3名は受講者であったと思われる。一方、後半に書かれている民間人を合計すると19名になるが、そのうち「大学生六名、札中三名、師範二名、高女一名、北中一名」の13名については、各校に保管されていた史料によって、次のように氏名が判明した。すなわち、北大生の6名は稲田昌植、野村竜吉、荒木忠郎、徳岡松雄、二木春松、角倉邦彦、札中（札幌中学校、現札幌南高校）の3名は皆川清治、安倍勁、高橋亀次郎、師範（北海道師範学校、現北海道教育大学札幌校）の2名は牧信立、神田繁、高女（札幌高等女学校、現札幌北高校）の1名は松野勇彌、北中（北海中学校、現北海高校）の1名は眞鍋篤夫である。その他の「有志三名」は、「道庁、通信」と思われる。具体的には、札幌スキー倶楽部の初代幹事に名を連ねている道庁の久慈博と宮川守、通信の立花多三郎である可能性が高い。

この講習会は3月14日から1週間であった<sup>42)</sup>。旭川スキー講習会については、新聞が連日のように取り上げていたのに対して、月寒講習会については、全く報道されていない。地元「北海タイムス」も報じなかったのはなぜか。筆者は、軍の守秘主義によるものではないかと推測している。

次にここでは、北大生が残した資料によって講習会の模様を見ていくことにする。

毎日朝の五時に起きて月寒まで通って夕方五時位まで、ビシビシ軍隊的に鍛へられたので、印度人の様な真黒な顔になるし、雪を食べたので口辺が腫れ上つたり随分偉い目をして埃国式のスキー術を習った。レルヒ氏の来朝のおかげで北日本に一時にスキー術が普及して今日の隆盛を招いた<sup>43)</sup>。

さらに、稲田は三瓶について、先に紹介した「[月寒小学校付近で] 烈風中に帆をあげて滑走し、小学校の女教員を小腋にかかえスキーで舵を取って無事学校の玄関迄送り届けた」<sup>44)</sup>というエピソードの後に、

三瓶氏は吾々をはじめ札幌の人々の有志を集めて、第一の練習[筆者注；月寒スキー講習会]を終えるや直ちにこれを一般に普及せんとして札幌スキー倶楽部の設立を計画し、余等もこの計画に参加した<sup>44)</sup>

と記している。このスキー講習会は三瓶が主任講師になって開催され、北大スキー部と札幌スキー倶楽部が創られるきっかけとなり、札幌にスキーを根づかせることになっていく。従って、現在札幌においてほとんど知られていないが、講習会が行われた月寒は札幌スキーの発祥地だったのである。

講習会の最終日、1912（明治45）年3月20日午後、三瓶は師範学校に招かれて生徒にスキー術について講演し、戸外で実地に滑って見せている<sup>45)</sup>。このように三瓶は、要請に応じてあちこちに出かけスキーを宣伝した。月寒講習会に参加した学生たちが、受講後に北大スキー部を創設したことはよく知られているが、「三瓶勝美氏が、北海道帝国大学予科へ出張して伝習した」<sup>46)</sup>という誤った説があることは、すでに述べた通りである。

## 第二節 藻岩山スキー登山

三瓶たちは、月寒講習会が終わったあと軍の検閲のため休んでいたが、3月末にスキーを再開した。「3月29日より月寒焼山付近で2週間の予定で練習する、申し込むと希望者には伝習する」

と新聞は報じている<sup>47)</sup>。これは、3月14日から開かれた講習会に続くものと思われるが、実際に行われたものか、期間や内容、さらに参加者や指導者など、いずれも不明である。しかし、以下に述べるごとく29日と31日、さらに4月5日には、三瓶たち主要なメンバーがスキー登山をしていることから、実際には実施されなかったと思われる。一方、月寒講習会を受講した者も、旭川の場合と同様に応用滑降と称して、札幌郊外の山にでかけたのは事実である。その頃、「中澤は益々その奥儀に入り、いかなる険山も恐れなほに上達していた」という。

中尉三瓶勝美氏は二十五連隊にてレルヒ中佐指導の下に過日來スキーの講習をなしつつ、ありしが三月二九日一隊十人(将校四名、大学生五名、外一名)はスキーにて海拔千八百尺の藻岩登山を企て登りは一時二十分間を要し下りは方向を真駒内に向け十四分八秒の大滑走をなしたるが途中数ヶ所に溜雪あり危険なりしも一同ぶじなりしと<sup>48)</sup>。

この1912(明治45)年3月29日の藻岩スキー登山が、札幌における最初のスキー登山であり、北大生にとっても初めてのスキー登山であった。これは先のレルヒによる半面山登山の約4週間後である。さらに、三瓶らは2日後の3月31日にふたたび藻岩山に挑戦している。

札幌練習者は去月二十九日と三十一日に未熟練の者を加へ十名藻岩岳(千六百八十尺)此傾斜延長一里余をスキーの効果を認め且自信力を増せり<sup>49)</sup>。

ところが、後に大野は北大スキー部史を検証せずに採用して「3月31日の藻岩山スキーが北海道で最初のスキー登山である」と記述し、それが定説になっていることはすでに述べた。

藻岩山へ二回目のスキー登山をした5日後の4月5日には、三角山にスキーで登山した。その模様を北海タイムスは「雄壮なスキー滑登」と題して、次のように報じている。

一行は軍隊側より十五名其他区内の大中学校の教員大学生等併せて廿三名一昨朝本社前に集合し九時廿分雄姿颯爽として大通りを目的地に向ひ十時半円山村三角山の麓に著し小憩後愈々当日演習の目的たる同山の滑登に取掛り数日來の暖気のため積雪漸く融けんとして動もすれば雪崩れのために駛走を妨げられたるにも拘はらず海拔千二百五十尺斜面の延長約半里に余まる山道を四十五分以内に頂上に達したり又降路は矢を射る如き勢を以て熟練者は十二分間に未熟練者と雖も廿分を出ずして山麓に達したるは觀る者をして思はず快哉を叫ばしめたり軍隊側と地方側とを分けて二回上下の駛走を試み更に基本動作の練習応用運動の試演等をなし又山上より一同手を連ねて山麓に急下する余興なども試みて十分の練習を積み薄暮各帰路に就きたり<sup>50)</sup>

これをみるとわかるように、この登山にはあらかじめ見物人を集め、その人たちのために基本動作や「一同手を連ねて滑る」(「連鎖滑降」とも呼んだ)などの演習をみせるというサービスが行われていた。これに関して、同じ記事のなかで三瓶は、次のように感想を述べている。

演習の目的はスキーが如何に雪国の冬に有用なるものなるかを十分に地方人に知らしめんためなりしに參觀人の多からざりしは遺憾なりし当日の運動が甚だ好成绩を示して少数ながらも觀覽者に十分スキーの価値を認めしむるを得たりしは聊か自から多とざるを得ず<sup>50)</sup>。

さらに、この頃のマスコミはスキー登山を通して、スキーを宣伝しようとしていた。例えば、札幌毎日新聞は、いわば現在のQ&A方式で、要約すると次のように掲載している。

Q I ; 自転車、自動車の如く平地を快速力にて滑走するものか、

A ; 元來スキーは積雪深く腰以上を没し全く歩行し得ざる時にありても自由に1時間1里位の速度にて行進する器具なり、表雪の具合にて1時間2里にも及ぶ故に自転車の如く速力を以て論ずべからず

QII ; 7尺もある長きもの穿き山に登るとは不思議なり多分ヌギて徒歩にて登り下山のみはくならんと、

A ; 登山は誠に易々たり夏登るよりも大々樂なり而も五十度内外の大斜面にても確実に登り得て疲労少なし之は今回 [注 : 3月29日の藻岩登山] の十名の勇士が実験せる所なり、

QIII ; 密林の内を通して行進し得るものか又重荷を負いて行進せざるならん、

A ; 密林を通して登山も可なり下山も苦なし重荷は十貫迄は熟伝せば負い行進し得べし<sup>51)</sup>

### 第三節 スキー製作と札幌スキー倶楽部の創設

#### 1. 札幌のスキー製作

三瓶は高田におけるレルヒのスキー振興策に学び、スキーを普及・発展させるために地元の札幌でもスキーを製造することと、クラブ設立の重要性を認識していた。

まず、スキーづくりの方はなかなか三瓶の思うように進まなかった。三瓶は3年前に北大生がカラーのスキーを見本に馬橋屋で作らせた経験から<sup>52)</sup>、スキーを作らせるとすれば馬橋屋だろうと狙いをつけ、まず北大生が頼んだ南一条の曲森馬橋屋を訪れた。懇願したが首をたてにふってくれなかったため、札幌の馬橋屋という馬橋屋をまわって頼んだが全て失敗した。次に締具に皮をつかっていることから馬具屋にも足を運んでスキーづくりを口説いたが、誰も耳をかたむけてくれなかった。

札幌のスキー製造について、のちに瓜生はおおよそ次のように記述している。

北大生がカラーのスキーを見本にして3年前に作らせた馬橋屋スキーで飽き足らなくなつて、どこかいいスキーを製造してくれるところがないか物色していた。彼らは、スキーという斬新なスポーツに相応しい近代的な製造者を望んでいた。店頭を飾る欧米の高級品を扱う宝石商の中野商店に目をつけた。といっても、宝石商とスキーとどこに結びつきをもとめたのであろうか。中野がスキーを作るにいたる経緯は詳らかではない。<sup>53)</sup>

このように、瓜生は月寒講習以前に北大生がスキー製造者を捜し始め、北大生が中野商店を見つけたとしている。その後三瓶が北大生を手助けして中野を紹介したと述べている。

ところが、三瓶自身がこの経緯について、次のように述べている。明治45年の冬のある日、スキーの帰りに時計修理のために中野時計店に立ち寄った。月寒連隊の御用商人でもあった主人の中野四郎が三瓶のもっているスキーをみて、「これが、スキーというものですか、一度すべてみせて下さい」と依頼し、三瓶は快く大通りの排雪でできた雪山でスキーを滑ってみせた。これをみた中野はスキーがすっかり気に入りに、三瓶のスキー製造者捜しで困っているという話を聞いて「それでは、私がスキーづくりを引き受けましょう」と約束した<sup>54)</sup>というのである(図6)。さらに、中野がスキーを作るにいたる経緯について、当時北大生の中心人物であった稲田も、のちに次のように証言している。

[三瓶は月寒スキー講習会を終えるや] 直ちにこれを一般に普及せんとして札幌スキー倶楽部の設立を計画し、…中略…これに先立ちスキー

四十五年の三月日曜毎に札幌でコ  
リ子供に迄普及させたいと思つて  
馬橋馬具屋等の主人を説いたが誰  
も耳を傾むけるものがなかつた。  
或時計店を獲つてスキーを携帶中  
野時計店に立寄つた處でスキー  
下といふもので大通の雪の山で  
滑つてみた處が中野さんすつか  
り氣に入つて時計屋さんがスキー  
を造り始める事になつた。之がス  
キー製作の元祖で今のツバメスキ  
ーの前身である。

図6 小樽新聞 昭和5年12月5日

製作所を物色し遂に現時〔大正15年〕我国に於て最も優秀なるツバメ印スキーの製造元なる中野氏に白羽の矢を立て同氏を説きて遂にその快諾を得て同氏はスキー製造に着手したのである<sup>44)</sup>

中野商店については、1972年に瓜生がまとめている。それによると、中野は三瓶との約束通り、45年の春のうちに店続きの土地を買収し、そこにスキー工場を建設した。高田連隊の下士官で、レルヒの講習も受けたことがあり、除隊して札幌にもどっていた大工の三間十七を雇った。雪の積もる頃には立派なスキーが製造されるようになった<sup>55)</sup>という。瓜生は、このとき中野の消息を捜したが判らずに「終戦前後に中島公園に近い小さな家で世を去ったと思われる」とし、円山墓地に墓があるので捜してみたいと述べている。1983年、佐藤が『北海道のスキーづくり』に中野のことを書いているが、文脈から瓜生論文を引用したようである<sup>10)</sup>。この時、佐藤は中野商店と四郎の写真を見出し掲載した。この四郎の写真を、拙著『日本のスキー・もうひとつの源流』に転載した。最近、これを見た札幌の時計店歴史研究家・池田秀世から中野四郎の長男・光郎の妻・マツヨが健在であることを教えられた。さらにその時、拙著に載せた中野四郎の写真は先代であって、後のツバメ印スキー社長であった二代目四郎は（図7）の写真が正しいと指摘された。

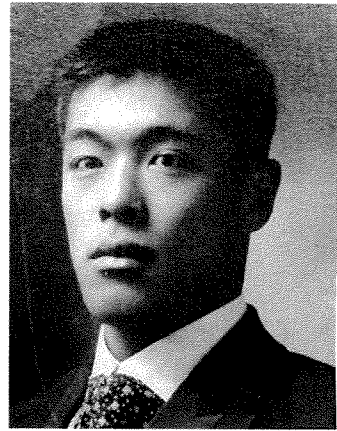


図7 二代目中野四郎

（中野マツヨ氏所蔵）

『開道五十年記念』によれば、

先代四郎は安政五年五月を以て越後國三島郡脇野に於て生る、父は飾職なりしを以て四郎亦飾職に従い後ち時計修繕販売業を経ず、明治十七年札幌に來り時計修繕及販売店を開き…<sup>56)</sup>とある。先日筆者が円山墓地にある墓石を捜しあてたその側面には、

越後國三島郡脇野町村

中野梅吉四男

嘉永三年八月八日生

明治十六年六月某日渡道

さらに、同じ墓石の別の側面には、

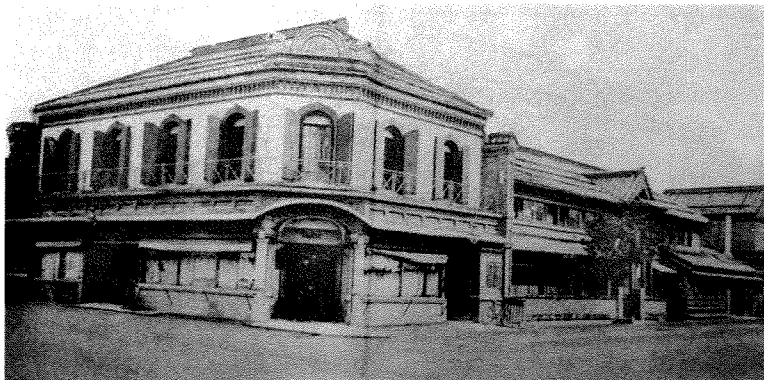


図8 中野時計店（右奥にスキー工場）

明治十八年一月九日於札幌  
南一條西二丁目九番地開店  
明治四十年一月三日於札幌  
南一條西三丁目七番地歿

と刻まれていた。従って先代四郎は、安政5年5月ではなく中野梅吉の四男として1850（嘉永3）年8月8日に新潟県三島郡脇野町村（現三島町）に生まれ、明治17年ではなく1883（明治16）年6月に北海道に渡り、1885（明治18）年1月9日に札幌南1条西2丁目9番地に開店したのである。店を開いた後四郎は「至誠と熱烈をもって家業の発展を謀り〔中野商店を〕本道第一」<sup>56)</sup>の老舗（図8）にするが、1906（明治40）年1月3日に病で他界した。次に、二代目四郎について『北海道人名録』には、次のように記載されている。

明治十九年十二月札幌に生る時計貴金属品商先代四郎の長男にして初名を一作と称す初め札幌中学校に入学し後慶應義塾中学部に転じ三十八年三月業卒へて慶應義塾大学予科に入る三十九年学を退き一年志願兵となり歩兵第二十五連隊に入営し四十一年二月陸軍歩兵少尉に任じ正八位に叙せらる先是四十年一月父の病歿に遇いて家督を相続し襲名して四郎と改む此年五月札幌の大火に店舗を類焼し宏麗なる今の中野時計店を新築せり<sup>57)</sup>

1912（明治45）年に三瓶に出会い、スキーを作ることになったのは、この二代目四郎である。もうけを度外視してスキー製作に打ち込み、札幌のスキー界や北大スキー部のために貢献した。このことについては、瓜生<sup>58)</sup>が詳細に記しているのので、ここでは割愛する。二代目四郎は、その長男である光郎の嫁・マツヨ（札幌市中央区）によれば、1945年1月25日に食道癌で亡くなったという。

## 2. 札幌スキー倶楽部の創設

スキー作りの苦勞に対してクラブの組織化の方は、案外順調に進んだようである。まず、北大スキー部は月寒講習會に参加していた稲田や角倉らが、発起人となり三百余名の賛同署名を集めて文武會に要請し、1920（大正元）年9月21日に創設された<sup>58)</sup>。後に大野精七は「我スキー部創設当時の恩人、ハンスカラー、三瓶少佐、初代部長大井上義近氏」<sup>59)</sup>というように、北大スキー部創設時の恩人のひとりに三瓶をあげている。

さらに、北大スキーが設立された後も、三瓶が中心になって軍隊、官公庁や中学校に働きかけ協議がかさねられた。その結果、鉄道通信管理局にスキークラブが作られ、北海道師範や札幌中学、北海中学の校友会にも、それぞれ対外的にスキー部が旗あげされた<sup>60)</sup>。

それらの会員が集まって札幌スキー倶楽部は、1912（大正元）年12月23日に結成された。その日、すでに本腰を入れてスキーを製造していた南一条二丁目の中野時計店に集まって、会員約400人で札幌スキー倶楽部の設立を宣言したのである。この頃中野は、スキー作りだけでなく、倶楽部づくりについても、役員になって活躍する他に集會場として自分の店を使わせるなど、積極的に協力していた。結成集會では、役員や規約について話しあい、倶楽部主催の第一回スキー練習會を12月29日に三角山で開くことなどが決められた<sup>61)</sup>。

年が明けて、1913（大正2）年1月25日に札幌区在郷軍人分会事務所、三瓶の他十数名が出席して幹事會が開かれた。ここでは、規約と協定事項が話しあわれ、次のように札幌スキー倶楽部の協定事項を決定した。

- (一) 会員の佩用する徽章は一個十錢を以て事務所より購入するものとす
- (二) 名誉会員の推薦人名は幹事に委任する事

(三) 団体にて本倶楽部に対して講習を申出るものある時は規約第七第八条の会員たる義務を果さしめ一般会員と見做すへき事

この時、札幌スキー倶楽部の役員には、会長に山之内支庁長、副会長に松本在郷軍人分会長が決められ、三瓶勝美は幹事長、中野四郎は会計に就任した<sup>62)</sup>。

#### 第四節 札幌スキー倶楽部のスキー講習

札幌スキー倶楽部が創設される前日の1912（大正元）年12月22日に、スキー講習会が三角山で開かれた。これは、札幌で開かれた最初のスキー講習会だったので、少し詳しくみてみよう。

これには、スキーを所有していない者でも会場で、中野商店が貸与すると新聞で宣伝していたので、希望者が150名も集まった。ところが、あいにくその日は軍旗祭と重なり、第二五連隊の三瓶ら講師陣が参加できなくなった<sup>61)</sup>。集まった者のうち3月に月寒で講習を受けていた北大生6名以外は、まったくの初心者だったので、急きょ北大生が講師になって午前中だけ講習することになった。スキーの持ち方、履き方、杖の持ち方、歩き方などで午前中の講習を終え解散した。ところが午後2時すぎに、三瓶らがかけつけてきたので、残っていた人たちが講習を受けることになった。まず、三瓶がスキーの扱い方、履き方と歩き方など午前中に行った基本から説明した後、四班にわけて平地滑りから開始した。説明と要領を一回示されただけで、うまくいくはずはなかったが、三瓶講師らはいちいち要領を示して熱心に指導した。

すでに冬休みになっていたので、参加者から「場所を決めて毎日教えてほしい」という要望がだされたという。このことから、この時の参加者の内訳は判らないが、学生のスキーマーが多かったと思われる。しかし、この時期は連隊の三瓶らが新兵教育で多忙であるという講師陣の都合で、実を結ばず結局、日曜日ごとに実施することになった<sup>61)</sup>。

倶楽部が設立された12月23日後の倶楽部主催第一回の講習会は、同月29日に開催された。続いて2回目は年が明けて2日に、いずれも三角山で行なわれた。この頃、小樽も札幌と同じようにスキー倶楽部が結成され、日曜日ごとにスキー講習会が開催されていた。小樽スキー倶楽部は、札幌より早く創設されていたが、札幌のスキー講習会の方が、小樽より活況を呈していたという。その理由として第一に札幌には北大や官公庁、学校のクラブ員が多かったことと、第二に先に述べた中野四郎のスキーブクリが軌道にのり、スキー場に数百台の貸しスキーが持ちこまれていた。このため、スキーを持っていない者でも受講できたからである<sup>63)</sup>。

これ以降も講習会は毎週日曜日ごとに行なわれる予定であったが、主任講師の三瓶が風邪をひいたために2週連続して休会になった。このことから、この頃の札幌のスキーマー界では三瓶抜きでは動きがとれず、むしろ三瓶が孤軍奮闘していたというのが実情であった。

第3回講習会は1月19日で猛吹雪だったが、約70名も参加して開かれた。翌週26日の第4回は参加者（約110名）や見学者（200名）が多くなったので、三角山よりも広い練習地がある月寒小学校裏



図9 大通りのスキーマー講習会（大正2年2月16日）

手の丘、後の「くり山スキー場」に変更して開かれた。ここは、前年三瓶たちが伝達講習会を行った場所であった。2月2日の第5回目には、受講者が約130名、見学者が約400名もいたという。三瓶ら数名の教官は6つの班にわけて午後4時まで指導した。2月9日の第6回目は、三瓶ら数名の教官が受講者約100名を三班にわけて講習し、第7回は11日に約50名（見学者約100名）の参加で行われた<sup>64</sup>。

1913（大正2）年2月16日、第8回講習会は、現在「札幌雪祭り」のメイン会場になっている大通西五丁目の雪山で行なわれた。札幌のど真ん中でのスキー講習会ということで、黒山のように見物人が集まった。約70名がスキーを履いて、三瓶の号令で雪山の西側にある平地に整列し、スキー使用法の簡単な説明を受けた。一列になって平地滑走を約1時間、雪山に登って「支え滑り」（斜めプルーク）や方向転換、3名ないし5名の並行滑走（連鎖滑走とか連杖滑走とか呼ばれた）などを行なった。三瓶の軽妙な滑走や札幌一中や北海中で卒業の近い者数名が頂上から急斜面を杖を持たず滑走するのを見て観衆は拍手喝采をしたという。午後は、全員が三角山にむかって行進し、そこでの日程を終了した。（図9）

第9回例会は3月2日に参加者約70名、三瓶や北大の稲田らが教官を務めている。第10回例会は同月9日に三角山で行い、11回は16日に月寒で開催された<sup>65</sup>。

このシーズンは、明治天皇の死去にともなう諒闇中ということで、スポーツ活動が控えられた。「スキー関係の団体では大喪の50日間は練習を中止する」<sup>66</sup>と高田日報が報じる程スポーツ行事が控え目であったことを考慮すれば、札幌スキー倶楽部の講習会が毎週のように11回も開かれたということは、異例な取りくみであったといえるかもしれない。

このような札幌スキー倶楽部の活動によって、とりもおさずそれは三瓶らの活躍だが、各学校や職場のスキークラブ員は、技術的にもかなりの成果をあげた。例えば、北海中学の運動部主任であった眞鍋篤夫は、

我が運動部に於ても已に十四台を買い入れ、現今其練習最中にして殊に冬季休暇中円山、三角山にて開かる、スキー大会に列席し、三瓶大尉以下数名の教官によりて教授を受け、今は実に其基本動作は充分に会得し<sup>67</sup>

と書いている。

三瓶は、札幌スキー倶楽部の振興以外にも、例えば小樽スキー奨励のためにも活躍した。それは、小樽新聞社の招きで札幌スキー倶楽部員を引き連れて、小樽を訪問しスキーを宣伝したことである。

### 第三章 スキー発展期の業績

#### 第一節 小樽へのスキー普及

月寒講習会が終わってまもない1912（明治45）年4月8日、三瓶をチーフに軍人4名と北大生5名の合計9名のスキー隊（図10）が、小樽新聞社の招待によりスキーの宣伝のために遠征した<sup>68</sup>。この時のスキー隊員は、月寒講習会の講師とその受講者であった。三瓶は、このことを次のように前もって小樽新聞社に知らせていた。

小樽とは密接の関係あるを以て、有志と協議を遂げ、

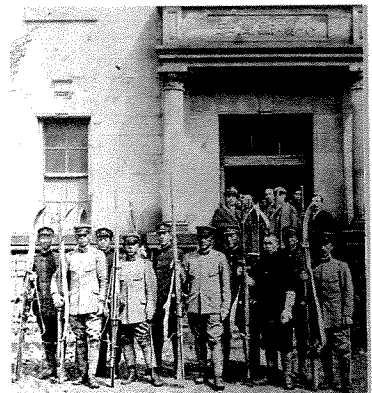


図10 小樽へのスキー遠征隊

且親睦を計りたく来る七日の第一日曜日を期して、当地より一隊を組織し、手稲山銭函等を踏破して出樽すべし<sup>41)</sup>

ここにもあるように三瓶は、当初札幌から手稲山、銭函を経て小樽までスキーで踏破する予定であった。これは途中張碓峠<sup>はりうす</sup>をはじめ、いくつかのピークを乗り越えていかなければならない山岳コースである。しかし実際には、雪不足と直前の豪雨などによってスキーで踏破することができなくなったため、汽車で朝里駅までいき、そこから山越えして小樽に入った。

この頃の小樽スキーは、すでに1ヵ月前から小樽高商（現小樽商科大学）の苦米地英俊が高田からスキーを持ち込んで盛んに滑っていた。さらに、小樽高女（現小樽桜陽高校）の佐藤林造と松丸乙彦が旭川でレルヒに習っており、旭川スキー講習会に加わっていた小樽新聞社の奥谷甚吉記者も本社の小樽に転勤してもどっていた<sup>69)</sup>。そのうえ、小樽新聞社がスキーの発展に力を入れ、この宣伝隊も同社によって実現したことは、すでに述べた通りである。

この日は、小樽新聞が事前に大々的に宣伝していたこともあって、小樽花園公園に千人以上の観衆が押し寄せたという。スキー隊は、この人達を前に約2時間スキーの実技を披露した。この時の様子は、小樽新聞が大きく紙面を使って報じた。翌日付け同紙には「軽業の様なスキー隊の妙技」と題して「一昨日花園公園で行った札幌スキー隊演技の後報」が、次のように報じられた。

熱心な観覧者が環視中最も注目を惹けるはグラウンドに接せる急斜面の応用運動にて最初三瓶中尉の先頭にて一列縦隊のまゝ丘上に起ち斜面滑りといふを行ふ、こは殆んど直角に近き斜面を対角線に似たる斜線を画きて下降するものにて身体を中心を一分にても誤たば忽ち崖下に墜落すべきを何れも巧妙に滑走し降る<sup>70)</sup>

このスキー宣伝隊のデモンストレーションがきっかけになって、小樽中学校や小樽水産学校の生徒たちに刺激を与え、急激にスキーの気運がたかまった。小樽スキー倶楽部は1912（大正元）年10月28日に創設された。同年12月8日に高商の校庭敷地付近で、同倶楽部主催の第1回スキー講習会が開かれ約20名が集まった。教官として三瓶と中澤が参加し、午後1時より屋内体育館でスキーの着脱、杖の持ち方、直立の姿勢、行進法、滑降の姿勢などを教え、2時から校庭にでてスキーを履かせて指導した。

さらに、翌年2月23日には三瓶以下63名の札幌スキー倶楽部員が、前年に続き2回目のスキー隊として訪問した。この時は、小樽側からも小樽スキー倶楽部や高商スキー部など約30名がでむかえた。午前中、札幌合同チームは花園公園で練習し、午後は百余名で高商裏手より稲穂岳頂上に登った。このとき、金子別邸後方丘上には数百人の見物人が集まり、斜面滑走の光景に歓呼の声をあげたと小樽新聞が報じている<sup>71)</sup>。

このように三瓶は、小樽のスキー倶楽部の組織化と普及・発展にも貢献しているのである。

## 第二節 軍事スキーの指導

三瓶が月寒におり札幌で盛んにスキーを滑っていた1915（大正4）年、旭川の北海道スキー倶楽部は第七師団と合併し、師団長宇都宮中将や矢野目参謀長らが全面的に協力することになった。連合スキー大会が翌年2月14日、第七師団演習場で開かれ約千名が参加した。開会式で名誉会員の矢野目参謀長が、

自分は当師団へ就任して以来日尚浅きが為にスキーを穿くことは極めて拙なり併しながらスキー術は之を実用に応用するの外一面には体育奨励上最も適当にして且理想的の運動法なりと信ず殊に北海道の如き雪国の青年は須らくスキー術を練磨し益々盛大ならしめんことを切

に希望する所なり<sup>72)</sup>

とあいさつをした。この時の大会種目に武装競走、戴囊競走などがあった。レルヒのスキー講習会が終了したとき、第七師団では「スキーは軍事的に有効である」という評価にならなかったため、スキーを積極的に軍事利用しようとする動きはみられなかったが<sup>73)</sup>、その後北方防衛の関係からスキーの必要性が徐々に認められつつあった。この大会で武装や戴囊競走が行われたのも、その表れであった。

1920(大正9)年8月、三瓶が少佐に昇格して第二七連隊付となって旭川に移った頃、師団内のスキークラブ・吹雪会は有名無実になっており隊内で熱心に滑っていたのは、三瓶ぐらいであった。しかし、時の内野師団長がスキーに強い興味をしめし、三瓶少佐を中心に吹雪会を再興する動きが出てきた<sup>74)</sup>。一方、陸軍は日露戦争で獲得した満州の權益をまもる名目で、第七師団を満州に出動させていた。ロシア革命(1917年)のどさくさにかこつけてシベリア出兵を行ない、尼港事件などのしっぺかえしを受けた<sup>75)</sup>。このシベリア出兵で寒気と積雪に関する研究、特にスキーや橇の軍用価値の重要性が一段と強く認められたのである。1920(大正9)年12月21日に行われた師団総出演習の際、スキーが有効であることを体感した内野師団長は、「雪国にいる將校がスキーも出来ないとあっては急の場合に困る」<sup>76)</sup>と軍事スキーの導入に本腰をいれ始めた。まず、山岡参謀が三瓶にスキー教練を受けることになった。

[大正10年]第七師団に於てはレルヒ中佐斯術普及十年経過の今日雪国師団の特色を發揮すべく雪の研究を為すに際しスキー術をも正科に加へ本年から通信任務等に応用研究する事に決し目下三瓶少佐を委員に挙げ各隊に於て熱心伝習してゐる来年二月には之を実地に応用演習する事に決した<sup>77)</sup>。

12月16日から三瓶が、主導教官となってスキーに関する解説、スキーの着脱及び携行法などの学科を偕行社で行った。参加者は、歩兵隊から各隊ごとに將校一名、下士三名、卒二四名、特科隊は將校一名、下士三名、卒九名で総数約百名であった。翌17日は実地教練に入り、以下3日目ごとの実習で30日まで、平地の動作、斜面登行、登行および滑走、制動滑走などの基礎技術のほか、軍事用に電話架設、伝令勤務、起伏地散兵、戦計、複雑地の行動(登山)、複雑地の斥候、機関銃の運搬、障害物(密林、小橋、小溝など)の通過をスキーを使って行なうことになった<sup>78)</sup>。電話架設の技術は、大正12年から始まった北海道や全日本スキー大会の長距離競走などで、軍隊が出て大会用の連絡電話線架設などで役立っている。12月19日から偕行社裏の春光台のふもとで、約五丁平方(約550m<sup>2</sup>)のゆるい凸凹のない傾斜地で実技が実施された。主任教官の三瓶少佐は、指導の結果を次のように述べている。

初習としては皆割合に熟達が早い様なので驚いてゐる僕等がレルヒ中佐に就いて習つた当時は平地歩行ばかり四日間もやつて未だ斜面滑走は出来なかつたが此頃の兵は充分に雪に馴れてゐる故か僅か三四時間の練習でどうにか転ばずに滑れる位の域に達し頗る成績が良好だ<sup>79)</sup>。

1922(大正11)年1月28日、スキー専習員全員と希望者による第七師団主催のスキー競技大会が開催された。種目には、軍装競走、通信競走、將校競走(希望者)などがあった<sup>80)</sup>。2月16日から5日間、三瓶が指揮をとって第二六連隊前山大尉中隊長以下30数名が、札幌第二五連隊のスキー部員と合流し110数名<sup>81)</sup>で塩谷付近から戦闘演習しながら、30里(約120km)の山野を跋涉している<sup>82)</sup>。

1923(大正12)年12月20日には、春光台で軍の本格的なスキー練習が開始され、軍隊スキーの研究が、ますますさかんに行なわれるようになった。歩兵二七連隊は鹿野大尉が指揮して將校10

名と下士以下200名が、2月27日に旭川から国道沿いに小樽まで全行程45里〔約180km〕をスキーで行軍した。

第七師団では、冬季期間中の体育練磨とスキーの軍事利用のため、前年につづき志望者に教練をほどこすことにした。師団では新たにスキー一五〇台を購入し大正13年11月24日に春光台の樹木の伐採や障害物を取り除くなどの手いれをしている<sup>83)</sup>。

1924（大正13）から25年シーズンには三瓶勝美が退役し、かわって第七師団の若松参謀大尉がスキー指導の主任になった。

従来、旭川第七師団のスキーについて「レルヒ少佐が1シーズンで旭川を去ると軍隊のスキーは急にさびれてしまった」<sup>84)</sup>といわれ、それが定説になっていることは先に述べた<sup>85)</sup>。旭川スキーの衰退した原因が林第七師団長にあったとされている。しかし、筆者は例えば

聞く處に依れば同師団長林中中将は負けず嫌ひなる事は長岡師団長と同様其上勇猛果敢、破天荒の人なりと云えば、一挙して大規模の練習を開始するなるべく、高田対旭川の今後のスキー勃興は両々相對して盛況を呈すべしと<sup>86)</sup>

という高田日報の報ずる林の性格と、その後の旭川スキーが活況を呈したことから見て、それが正しいとは思えない<sup>87)</sup>。すでに見たように実際には、レルヒ帰国後も師団をあげて取り組み、1920（大正9）年度以降は本格的に軍隊スキーを取り入れていたのである。ここでも三瓶は、師団長の命により軍事スキー教練の主任教官を務めるといふ重責を果たしていた。つまり、日本における本格的な軍事スキーの導入は、三瓶によって始まったといっても過言ではない。

### 第三節 スキー発展期の活動

最後に、1913（大正2）年以降の民間スキーの発展をみておくことにする。まず、1913（大正2）年から14年シーズンは雪が遅かったので、

札幌スキー倶楽部にては、来る十一日より毎日曜日毎に、月寒公園に於て、スキー術講習を開始すべく、会員は午前九時より参集すべしと<sup>88)</sup>

と予告が出て講習会が開かれた。

第一回講習には会員参集終日スキーマートの本領を發揮して壯觀を極めたり、定刻の午前十時迄に百余名の記観者ありて既習者も新習者も自習に耽る内、教官三瓶大尉の指導にて全講習員を、甲乙丙の三班に分ち、愈々正式の講習開始、甲班は既に昨年を以て大体に通曉する人々のこと、て傾斜面を利用して、右左滑り、支え滑り、全排雪緩止急止の方法を復習するあり、乙班は斜面滑降及び緩止など、丙班はスキーの着脱法より平地の滑走転倒起立法、左右後向きを換え並びに登坂法などを教習、

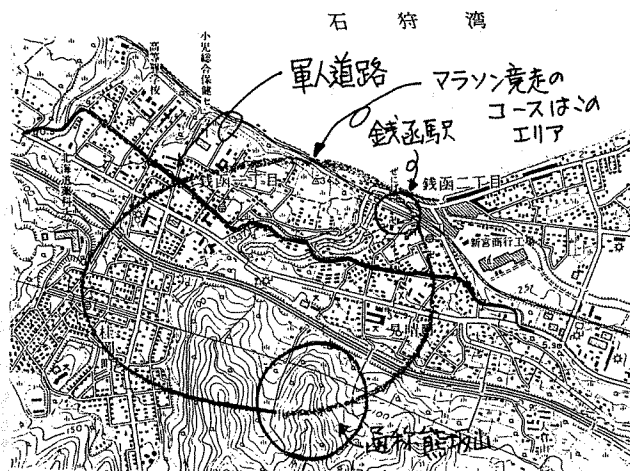


図11 札幌スキー倶楽部主催の第1回スキー大会

正午休憩の午後同様の方法を幾回となく繰返し既習者は玩味し、新習者し多大の興味を感じて各得意の色あり、四時三瓶大尉より次回講習の方法を言渡されて散会<sup>89)</sup>。

11月16日の第2回以降は、三角山に変更して第3回目は1月25日、第4回目は2月1日、第5回目は2月8日、第6回目は2月15日、第7回目は2月22日に行なった。第8回目の3月1日には、場所を月寒にもどしている。

さらに、3月8日には札幌スキー倶楽部主催の第1回スキー大会が、銭函で開催された<sup>90)</sup>。この大会が、札幌で開かれた初めてのスキー大会であるにもかかわらず、いままでのどの札幌スキー史にも書かれていない。さらに、この二週間前に北大スキー部が同じ場所で開催した第1回スキー大会についても「スキー大会を銭函に開催約二軒のデスタンスレースを行ふ」<sup>91)</sup>と記録されているだけである。なぜ、銭函が開催地に選ばれたのか謎である。筆者は、講師であった月寒連隊の三瓶たちが、日頃スキーの訓練につかっていたからで、その場所は通称「熊坂山」と呼ばれていたあたりではないかと推察している。(図11)

1914(大正3)年度以降は、札幌スキー倶楽部としての活動が停滞した。しかし、スキーの活動が停止したのではなく、各学校や職場単位でスキーが行われていた。同スキー倶楽部の活動が停滞したのは、それまでの2シーズンの講習会で各学校や職場に、技術の高いスキーヤーが養成されたので、自前で活動できるようになったためである<sup>92)</sup>。この2シーズンに三瓶は、要請があったときに講師として指導に出かけたものと思われる。すでに見たように、レルヒによってある程度定着していたノルウェースキー技術は、北欧から帰国した北大の遠藤吉三郎によって、1916(大正5)年頃から一段と脚光を浴びるようになった。

1917(大正6)年から三瓶が、第七師団副官として旭川に転勤し、軍事スキーの指導教官として奮闘したことは、すでに詳述したとおりである。三瓶は現役を引退して札幌に居を移し、1923(大正12)年の第1回全日本スキー選手権大会時も大会役員であった(図12)。同じ役員であった北大の加納一郎らを援助した。後に加納は、

学校を出たばかりで稚気満々たる私が、スキー選手権競技会の運営にあたるはめになったとき、実に穏健、適切な意見をもって指導していただ [いた]<sup>93)</sup>

と述べている。先の選手権大会の北海道予選会で、競技規定をめぐって小樽スキー倶楽部と北大スキー部が対立し、北大は本大会をボイコットした。この時も三瓶が調停の労をとり、両部がこの斡旋に謝して和解した<sup>94)</sup>。その頃、三瓶は道庁に勤めながら、1915(大正4)年以降開店休業で自然消滅していた札幌スキー倶楽部の再建に取り組み、1925(大正14)年1月によりやく再結成に成功し、初代理事長に選出された<sup>95)</sup>。

三瓶の温厚な親しみ深い人柄は、全日本スキー連盟の創設時にも発揮された。

大鰐で全日本スキー連盟をつくりあげるときなど、影になり、あるいは表に立って数々の助言をうけることになった。まさに日本のスキー競技界がかたまるうとしていただいな時点で、三瓶さんの影響力はまことに大きく、ともすればきしみがちだった局面を展開していくことができたのであった<sup>93)</sup>



図12 第1回大会の賞品授与式で三瓶が中央にいる。

と加納は記している。1924（大正13）年に開かれた第2回全日本スキー選手権大会（新潟県高田）、翌年の3回大会（青森県大鰐）、さらに25年の4回大会（樺太豊原）に、三瓶は北海道選手団の総監督として3回連続出場した。

1929（昭和4）年12月、三瓶の所属する札幌スキー倶楽部や北大スキー部など41団体、1966人の会員からなる札幌スキー連盟が結成された。その時、「明治45年旭川でレルヒ中佐の教えをうけ、札幌に帰ってスキーの普及指導にあたった[という功績をもつ]三瓶勝美」<sup>97)</sup>ということで常務委員に選出された<sup>97)</sup>。

のちに北大スキー部の主任幹事であった向井一郎は、

札幌にスキーというものが知られるようになったのは、……レルヒ氏の指導、殊に三瓶氏の熱心なる宣伝指導に依るものである<sup>98)</sup>

と記述している。さらに、北大スキー部OBでスキー界の重鎮であった稲田は、

正式のスキー術を一般に普及し倶楽部を早くも設けて後年斯界の大発展の基を作り、今尚ほ斯界に努力しつつある三瓶氏及びスキー製作に多大の貢献をした中野氏この両氏は斯界にとり忘る可らざる功勞者であるのである<sup>99)</sup>

と中野と三瓶を評している。さらに加納は、「三瓶勝美さんは、石頭のおおかった陸軍のなかで、めずらしく温厚な親しみ深い紳士であった」<sup>99)</sup>と三瓶の人柄を述べている。このような三瓶だったからこそ、スキー界に貢献できたといえるかもしれない。

## おわりに

以上のことから、三瓶が北海道スキー界に果たした業績は、次のようにまとめることができる。

- 1) 明治45年3月、月寒においてレルヒの技術を軍隊や北大生など多くの民間人に伝えたこと、
- 2) スキー発展の基となる組織、スキー倶楽部を創るために奮闘した。それは、大正元年9月に北大で全国初の大学スキー部が創設され、さらに中等学校をはじめ各職場にスキー組織が創られた。
- 3) これらのスキー組織がまとまって、札幌では大正元年12月に札幌スキー倶楽部、小樽では同元年10月に小樽スキー倶楽部が設立された、
- 4) 札幌スキー倶楽部が創設された後も、その要職について発展のために尽力した。
- 5) スキー普及に欠かすことのできない「安いスキー用具の地元製作」に奔走し、中野四郎という適任者を見つけだした。
- 6) 三瓶は、北海タイムスへの投稿論文でわかるようにスキーについて高い理論を持っていた。なぜ三瓶が、これほどまでに多くの功績を残すことができたのか。1911（明治44）年、高田第十三師団は、レルヒからスキーを学び、研究した結果を『スキー研究報告及び意見』にまとめて、陸軍省副官の竹島音次郎に報告している。その中で、スキーの軍事利用について、

豪雪時ニ於テハ大部隊ノ戦闘ヲ惹起スルコトナク且ツ東洋大陸ニ於テハ降雪ノ量少ク且ツ硬キヲ以テスキー作戰ニ使用スルコトハ蓋シ鮮ナカラン<sup>100)</sup>

と書かれているように、高田師団は消極的な評価を下していた。研究熱心だった三瓶は、このことについて、すでに知っていたと思われる。それ故三瓶は、1912（明治45）年3月の北海タイムスに投稿した論文に、「軍事上の利用方法」を入れなかったのである。第七師団でも、高田師団と同様にスキーの軍事的評価がなされたか否か、さらに高田師団の『スキー研究報告及び意見』に類する報告がされたのか否か、いずれも不明である。今夏、国立公文書館や防衛研究所図書館、

さらに国会図書館で検索したが、それらは発見されなかった。しかし筆者は、旭川師団も何らかの形で報告を出している可能性は高いと思っている。今後も引き続き捜したい。

ところで、第七師団もレルヒ帰国後、すぐに師団全体で軍事スキー研究に取り組んでいないことは、すでに述べたとおりである。このような中で軍人である三瓶が、なぜこれほどまでにスキーに打ち込んだのか。これに直接ふれた三瓶の手記は残っていない。当時、雪国における青年の体位向上が富国強兵策上重要な課題であるということから、スキーがそれに有用であると認識されていたので、三瓶の職業軍人としての使命感からスキーに情熱を燃やしたと推察される。しかし筆者は、父の留守中に体得したスキーを13歳から死ぬまで一生涯愛し続けたという事実からみて、軍人魂からだけでなく、三瓶がスキーの魅力にとりつかれたマニヤックであったことも大きな要因であったと思っている。

いずれにしても、小川が「日本のスキー地を信越、東北、北海道と大きく三つにわけ、高田の鶴見亘信大尉、弘前の油川貞策中尉、札幌の三瓶勝美中尉が代表的な存在であった」<sup>101)</sup>といい、稲田がいうように「三瓶こそ忘るべからざる北海道スキーの功労者」であったことは確かなことである。彼のスキー界における活躍は、スキーの発祥から定着・発展した四半世紀に、まさに「北海道スキーの父」というに相応しい偉大な功績を残すものであった。

#### 〈付記〉

本論文は、日本体育学会体育史専門分科会春の定例研究集会（金沢 2000）にて、発表した論文を、大幅に補筆修正したものである。資料収集に際し三瓶勝美の末娘中川アヤとその二男中川二郎、杉山由紀子（勝美に三男英世の三女）、中野マツヨ（二代目四郎の長男の嫁）、池田秀世（札幌時計店史研究家）、志村秀裕（札幌南高校）の各氏にご協力いただいたことを記して感謝申し上げます。

#### 〈脚注・引用文献〉

- 1) 中浦皓至『日本スキー・もうひとつの源流』、北海道大学図書刊行会、1999、pp. 61-107.
- 2) 小川勝次『日本スキー発達史』、朋文堂、1956、pp. 27-28.
- 3) 北大スキー部史では、稲田が初代主任幹事となっているが、筆者は、①角倉本人の証言、②幹事の中に稲田の名がない、③稲田は野球部の主任幹事になっているなどから、この結論が正しいと確信している。
- 4) 「スキー部報告」『文武会会報』第68号、1913、p. 121.
- 5) 「一日風雪にも不拘練習する事になったが、連隊附近の小学校附近で三瓶教官は烈風中に帆をあげる意味で将校マントを手をあげて張るや忽ち満帆に風を孕んだ勢で滑走し、前面に堅雪を踏んで近道をし乍登校しつつあった小学校の女教員に衝突し、勢いよくこれを凌つて小腋にかかえたまま滑走したのでどうなる事かと思つて見て居ると、さすがは教官見事にスキーで舵を取つて無事学校の玄関迄送り届けた（稲田昌植「スキー部創立当時の回顧」、『記念創立拾五年』、北海道帝国大学文武会スキー部、1926、p. 269）。
- 6) 小川玄一「部の歴史として」、前掲書5)、p. 272.
- 7) 例えば山崎紫峰は、「[明治45年2月には]旭川師団付きに転任したレルヒ少佐に依つて、北海道地方へもアルペン・スキーが伝えられ、そこで養成された月寒連隊付歩兵中尉三瓶勝美氏が、当時札幌農科大学と云つた北海道帝国大学予科へ出張して、同科生の伝習会教師として活躍したのであった」と記している。ここで「三瓶が北海道帝国大学予科へ出張して伝習した」（傍点筆者；以下同じ）は誤りであり、同書の

「スキー史上の人々」の三瓶の項においても、「過去に於ける関係スキー団体としては、明治四十五年三月よりの札幌スキー倶楽部会長、及び旭川スキー倶楽部会長を始め、五指に余る程の肩書を持って居た」（山崎紫峰『日本スキー発達史』、朋文堂、1936、pp. 27-28）と記述している。札幌スキー倶楽部は、三瓶が会長ではなく幹事長であり、さらにこの時点で旭川スキー倶楽部との関わりはない。山崎は、この記述を三瓶本人の証言にもとづいて著したとしているが、もし山崎が誤記したものでなければ、回顧録を検証せずに採用したことから生じた誤りであろう。二十数年前の回顧談ともなると、必ず裏をとらなければならない。

- 8) 小川勝次の著書には、大正2年から同11年までを「群雄割拠時代」（小川、前掲2, p. 35）と呼んで全国スキー地の草分けと称して50数名をあげている。その中に三瓶の名前も列挙され、別の所にも「昭和12年に逝去」と記述されている。小川が、この著作を編む頃は三瓶が逝った後であり、実証的な検証もされていない。
- 9) 瓜生卓造『スキー三國志』、スキージャーナル社、1970、p. 29.
- 10) 佐藤徹雄『北海道のスキーづくり』、市立名寄図書館、1983、pp. 42-50.
- 11) 高橋憲一『札幌歩兵第二十五連隊誌』、大昭和興産、1993、p. 649.
- 12) 新井博「日本スキーの開拓者桜庭留三郎」（『日本スキー学会誌』、第7号、1997、pp. 217-230）、「樺太に於けるノルウェー式スキー術の導入と普及について～金井勝三郎の大正4年から大正6年における活動を中心に」（『日本スキー学会誌』、第9号、1999、pp. 151-162）.
- 13) 白田明「長岡外史のスキー思想」（『信濃』第43巻3号、1991、pp. 239-256）、「スキー開拓者・高橋良～日本のスキーの発見と軌跡」（『信濃』第45巻10号、1993、pp. 858-867）.
- 14) 伊藤広『屯田兵村百年（上）』、北海道新聞社、1979、p. 135.
- 15) 三瓶勝美談「本道初期のスキー」、『小樽新聞』、昭和3年2月22日付.
- 16) 三瓶は、明治43年の紀元節の日（2月11日）と小樽新聞（昭和3年2月22日付）に述べているが、ここでは、樺太日日新聞（明治44年2月2日付）に記載されている「明治43年3月13日」が正しいと考えた。尚、この時三瓶は2位であったと報じているので、「明治43年3月」の新聞で確かめようとしたが、新聞が保管されておらず果たせなかった。
- 17) 佐藤、前掲10）、p. 44.
- 18) 山崎、前掲7）、p. 260.
- 19) 小川、前掲2）、p. 229.
- 20) 栗林薫『北海道一般スキー八十年の歩み』、私家版、1991、p. 7.
- 21) 『山とスキー』第46号、山とスキーの会、1925、p. 31.
- 22) 佐藤は「65歳」（佐藤、前掲10、p. 45）、栗林は「55歳」（栗林、前掲20、p. 7）と異なっている。死去した日については、両者ともに一致していることから計算すると55歳が正しい。逝去したことについては、昭和12年4月3日付北海タイムスに「軍事スキーの恩人三瓶少佐急死 洞爺湖の電車内で」と報じられている。
- 23) 「故レルヒ氏らに感謝状贈る スキー発祥五十周年記念祭」（『北海道新聞』、昭和35年12月4日付）.
- 24) 瓜生、前掲9）、p. 30.
- 25) 山崎、前掲7）、p. 260-261.
- 26) 中浦、前掲1）、p. 50.
- 27) 松下高信「日本における近代スキー導入のきっかけについて」、『第42回日本体育学会』、1991.
- 28) これについて大野は「明治39年にデルメーランド・キーフ」（大野、前掲29、p. 7）、山崎は「明治42年に

- デルメー・ランドクリーフ」(山崎, 前掲7, p. 15), 瓜生は「明治43年にクリーフ」(瓜生, 前掲9, p. 29)と三者とも異なっている。筆者が2000年8月に防衛研究所図書館で見つけた第二五連隊の文書によると、「英国武官エス, エー, デルメラトクリッフが明治43年3月に隊附きを終了」とある。
- 29) 大野精七『北海道のスキーと共に』, 私家版, 1971, p. 10.
- 30) 『小樽新聞』, 昭和5年12月15日付.
- 31) 中浦, 前掲1), pp. 69-74.
- 32) 『北海道新聞』昭和33年3月20日付.
- 33) 山の頂上より断崖を直転一下して滑降する際小胆なるものは必ず失敗すべし(「壮絶快絶なるスキー登山(上)」)『小樽新聞』明治45年3月5日付)というように、当時は胆力を練るという軍人魂を養うこともスキーの効用のひとつにあげられていた。
- 34) 「壮絶快絶なるスキー登山(下の下)」『小樽新聞』, 明治45年3月9日付.
- 35) 『北海タイムス』, 明治45年3月9日付.
- 36) 大野, 前掲書29), p. 11.
- 37) 『小樽新聞』, 明治45年3月14日付.
- 38) 『第二五連隊歴史』, 明治45年3月13日.
- 39) 吉田尚「札幌のスキーはくり山が発発」, 『つきさつぶ郷土資料館だより』第14号, 月寒郷土博物館, 1997, p. 2.
- 40) 高橋, 前掲11), p. 136.
- 41) 『小樽新聞』, 明治45年4月5日付.
- 42) 「月寒のスキー本日より1週間月寒連隊に於てスキー練習を行ふ由」(『小樽新聞』, 明治45年3月14日付).
- 43) 角倉邦彦「北海道スキー発達の事情」, 前掲7), p. 365.
- 44) 稲田, 前掲5), pp. 270-271.
- 45) 『師友』第57号, 北海道師範学校, 明治45年7月30日, p. 165.
- 46) 山崎, 前掲7), p. 27.
- 47) 『札幌毎日新聞』, 明治45年3月27日付.
- 48) 『小樽新聞』, 明治45年4月2日付.
- 49) 『北海タイムス』, 明治45年4月5日付.
- 50) 『北海タイムス』, 明治45年4月7日付.
- 51) 『札幌毎日新聞』, 明治45年4月7日付.
- 52) 中浦, 前掲1), pp. 22-25.
- 53) 瓜生卓造『スキー風土記』, 1978, p. 23.
- 54) 『小樽新聞』, 昭和5年12月5日付.
- 55) 瓜生卓造「スキーの裏方たち=発掘・日本スキー用具発達史=第4回札幌スキーの黎明」, 『スキー』, 1972, p. 162.
- 56) 「札幌唯一の時計店の老舗 札幌区 中野四郎」『開道五十年記念・北海道』, 1918, p. 454.
- 57) 金子郡平「中野四郎(なかのしろう)」『北海道人名録』, 札幌北海道人名辞書編集事務所, 1914, pp. 104-105.
- 58) 北大スキー部の創設年月日は、全ての先行研究が明治45年6月としているが、これは誤りである(中浦, 前掲1, pp. 180-184)。

- 59) 『北海タイムス』, 大正15年11月25日付.
- 60) 『北海タイムス』, 大正元年12月25日付, ここで「対外的に旗揚げされた」という表現をもちいたのには訳がある。各学校に残された資料を分析したところ, 正式に「校内で認知された」のは, 札中が大正7年, 師範が同9年, 北中が11年であった(中浦「札幌の中等学校スキー部の創設とその活動についての研究」, 『日本スキー学会誌』第9巻第2号, 1999, pp. 139-150)。
- 61) 『北海タイムス』, 大正元年12月30日付.
- 62) 『北海タイムス』, 大正元年12月23日付.
- 63) 『北海タイムス』, 大正元年12月22日付.
- 64) 中浦, 前掲1), pp. 232-234.
- 65) 中浦, 前掲1), p. 234.
- 66) 「第4回選手権大会も中止すべく近く発表することになった。随って各地の予選は勿論中止される筈である。尚スキー関係の団体では五十日間は練習を中止する筈である。」(『高田日報』, 大正元年12月28日付)。
- 67) 『協学会雑誌』第9号, 北海中学校, 大正2年1月25日, p. 206.
- 68) 『小樽新聞』, 明治45年4月8日付.
- 69) 中浦, 前掲1), pp. 240-242.
- 70) 『小樽新聞』, 明治45年4月9日付.
- 71) 『小樽新聞』, 大正2年2月24日付.
- 72) 『小樽新聞』, 大正4年2月17日付.
- 73) 中浦, 前掲1), pp. 210-211.
- 74) 『小樽新聞』, 大正9年12月1日付.
- 75) たまたま尼港残虐事件後のシベリア出征で, 日本軍がスキーや纜の運用を知らなかったため, しばしば悩まされ辛い経験をなめた。その後, 寒気と積雪に対する研究の必要が唱えられ「冬季作戦研究」を行うことになった。このようにして, 七師団にスキー隊が編成され, 毎冬軍隊スキー術というものが案出されるに至った(『小樽新聞』, 昭和3年2月21日付)。
- 76) 『小樽新聞』, 大正9年12月23日付.
- 77) 『北海タイムス』, 大正10年12月9日付.
- 78) 『小樽新聞』, 大正10年12月17日付.
- 79) 『小樽新聞』, 大正10年12月21日付.
- 80) 『北海タイムス』, 大正11年1月28日付。 / 『北海タイムス』, 大正11年1月30日付.
- 81) 『北海タイムス』, 大正11年2月18日付.
- 82) 『北海タイムス』, 大正11年2月9日付.
- 83) 『小樽新聞』, 大正13年11月26日付.
- 84) 高田出身の小川は, 地元びいきからか高田の長岡師団長の功績を讃えたのに対し「[旭川の] 林師団長はスキーの軍事上の価値に失望したためかそれ以上熱意を示さず…民間人の事を考えなかったので旭川のスキーはなんら実を結ばなかった」(小川, 前掲2, p. 25)と述べている。
- 85) 上記の小川説を受けて, 例えば「当時第七師団長は上原勇作中将であった。しかし上原中将とやがて交代した林師団長はスキーに反対した」(大野, 前掲29, p. 10)とあり, この大野説を引用補足した小原は「時の第7師団長上原中将が, スキーのスキーの軍事的価値を考えてスキー講習会を開催したにもかかわらず, 次の師団長林中中将はその価値を認めず, スキーの普及に反対し, レルヒ中佐が旭川を去るとともに,

軍隊のスキー講習会を行わなかったため、急激にさびれてしまった」(小原正巳「本道のスキー渡来と夜明け」、『北海道スキー連盟創立五十周年記』,1982,p.13)とした。さらに、佐藤も「林師団長は軍事上の価値に失望したのかスキーの利用、普及、発展の熱意を示すことはなかった」(佐藤、前掲10,p.41)と記述している。

- 86) 『高田日報』, 明治45年2月14日付.
- 87) 中浦, 前掲1), pp.66-68.
- 88) 『北海タイムス』, 大正3年1月9日付.
- 89) 『北海タイムス』, 大正3年1月16日付.
- 90) 中浦, 前掲1), pp.237-238.
- 91) 年報, 前掲5), p.377.
- 92) 中浦, 前掲1), p.238.
- 93) 加納一郎「初期の北海道のスキー」, 『スキー発達史』, 実業之日本社, 1971, p.276.
- 94) 『創立十周年記念』, 小樽スキー倶楽部, 1930, p.38.
- 95) 小樽新聞(大正14年1月14日付)には、「札幌スキー倶楽部成る・発起人会開く」と題して次のように報じている。「従来札幌スキー家連の間に折々話題に上っていた札幌スキー倶楽部は、過般来三瓶少佐其他二、三人々の尽力により漸く其の成立の運びに至り」として、1月12日、札幌有合亭に30名が参集し、三瓶を座長に規約草案と役員を選挙し、理事長に三瓶を決定した。
- 96) 『宮様スキー大会五十年史』, 札幌スキー連盟, p.40.
- 97) 大野, 前掲29), p.60.
- 98) 向井一郎「スキーの思い出」, 前掲29), p.89.
- 99) 稲田, 前掲5), p.271.
- 100) 「スキー研究ニ関スル報告送付ノ件」『明治四十四年乙輯第三類永存書類』, 防衛研究所図書館所蔵.
- 101) 小川勝次「スキーの歴史」『スポーツ80年史』, 日本体育協会, 1959, p.203.

#### 〈写真及び図の出典〉

- 図1 中尉時代の三瓶勝美；中川二郎氏所蔵
- 図2 三瓶勝美の回顧談；小樽新聞, 昭和3年2月22日
- 図3 第七師団歴史；旭川北鎮記念館所蔵
- 図4 第二五連隊歴史；北海道神宮所蔵
- 図5 第七師団偕行社前のレルヒとスキー研究員；神崎明氏所蔵
- 図6 三瓶勝美の回顧談；小樽新聞, 昭和3年2月22日
- 図7 二代目中野四郎；中野マツヨ氏所蔵
- 図8 中野時計店(右奥にスキー工場)；中野マツヨ氏所蔵
- 図9 大通りのスキー講習会(大正2年2月16日)；『北海タイムス』, 大正2年2月17日付
- 図10 小樽へのスキー遠征隊；『小樽新聞』, 明治45年4月8日付
- 図11 札幌スキー倶楽部主催の第1回スキー大会；国土地理院二万五千分の1「銭函」
- 図12 第一回大会の賞品授与式で三瓶が中央にいる；『スポーツ八十年史』, 日本体育協会, 1959